

自由に思考すること・信じること・愛すること

To liberalize your thinking, to believe and to love *

鈴木寛 (Hiroshi Suzuki)

1:キリスト・イエスの僕たち、パウロとテモテから、ピリピにいる、キリスト・イエスにあるすべての聖徒たち、ならびに監督たちと執事たちへ。2:わたしたちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安とが、あなたがたにあるように。3:わたしはあなたがたを思うたびごとに、わたしの神に感謝し、4:あなたがた一同のために祈るとき、いつも喜びをもって祈り、5:あなたがたが最初の日から今日に至るまで、福音にあずかっていることを感謝している。6:そして、あなたがたのうちに良いわざを始められたかたが、キリスト・イエスの日までにそれを完成して下さるにちがいないと、確信している。 口語訳：ピリピ人への手紙 1章 1節-6節

1 Paul and Timothy, servants of Christ Jesus, To all the saints in Christ Jesus who are in Philippi, with the bishops and deacons: 2 Grace to you and peace from God our Father and the Lord Jesus Christ. 3 I thank my God every time I remember you, 4 constantly praying with joy in every one of my prayers for all of you, 5 because of your sharing in the gospel from the first day until now. 6 I am confident of this, that the one who began a good work among you will bring it to completion by the day of Jesus Christ.

New Revised Standard Version:
Philippians 1:1-6

讃美歌：121

*国際基督教大学教会卒業送別礼拝, 2019年3月17日

1 はじめに

1.1 一般教育科目「メッセージ」

わたしは、一般教育科目の数学で期末試験を含めて9回試験をしています。毎回「メッセージ欄」をもうけ「お題」を与えて、受講生にメッセージを書いてもらっています。この部分は、評価には関係しませんが、多くの学生が真剣に書いてくれます。

理系以外の受講生向けで、社会科学で必要な数学や、理系メジャーで提供している基礎科目を履修する準備が目的のコースですが、高校数学の復習ではなく、数学の考え方や、理系であっても高校では扱わない内容も含みますから苦しむ学生が多くいます。解決が困難な時は、制約条件をゆるめて、一般的・普遍的な問題に直したほうが本質が見えやすく解決しやすいということが数学ではよくあるので、このメッセージ欄では、人生の問題に置き換えて、なぜこんな数学なんかに苦勞して取り組むのかを考えてもらっています。

今日の「自由に思考すること・信じること・愛すること」はその7番目の「お題」です。ぼんやりとしたテーマですから、様々な応答が可能だと思いますが、みなさんは、どのような応答をされるでしょうか。実は、最後の三つは「I」と「C」と「U」に関連させており、これが「C」キリスト教に関連させた問いです。以前はもっと直接的に「聖書を読んだことがありますか」とか「キリスト教についてICUの『C』について」などでした。学生のメッセージに対しては、わたしが一言書いて返していますが、同時に「許諾」を取って、メッセージを入力し、わたしのホームページにも掲載していますので、興味のあるかたは、検索してみてください。

1.2 「お題」について

国際基督教大学におけるリベラル・アーツ教育は「自由に思考することをたいせつにする教育」

と表現することができると思います。

学生からは「信仰」は「自由に思考すること」を妨げるのではないか。「自由に思考すること」によって「愛」に到達するのだろうか。ある正しさを「信じること」は「愛すること」を阻害するのではないか、などと質問を受けます¹。いずれも、とても、適切な問いだと思います。

2 自由に思考すること

2.1 自由について

ICUでたいせつにしている「世界人権宣言 (Universal Declaration of Human Rights)」の第一条は「すべての人間は、生れながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利とについて平等である。(Article 1. All human beings are born free and equal in dignity and rights.)」と始まります。まず「自由」について述べられ「尊厳」「権利」について平等だとしています。ひとが自由であるためには、まずそのひとの「尊厳」が守られなければいけないと思います。「尊厳」は「ひとりのひととして認められること」でしょうか。「幸せ」を実感できるかどうかの要素として「自己決定権」が重要であると言われますが「あなたが決めていいよ、でも結果はあなたの責任ね」で、尊厳が守られるのか、本当に自由なのか考えさせられます。

2.2 思考の解放

思考が解放されていく経験について少しお話しさせてください。

一つ目は、方法論からの解放です。どのような方法がよいかを考えているときに、それは、何のためかを確認することによって、手段にしばられなくなることがあります。お金や時間は、たいせつですが、それが、何のためなのかを、明確にすることによってそれらから自由になることがあります。わたしは、あるものが欲しくなると「これを手に入れたら、自分は幸せになるだろうか。これを手に入れないと、幸せにならないだろうか」と自分に問うことにしています。幸せに結びつけて検証することで、ものに縛られない、自由を手にする場合もあります。

二つ目は、なにがより本質的、根源的、普遍的かを考えることです。「平和」は誰にとっても、

たいせつな願いです。先ほど取り上げた「世界人権宣言」は戦後まもなく、国際連合で議論されました。「自由」や、「尊厳」と「権利」に関して平等という考え方は、軍縮や、平和維持のための軍隊による平和よりも、根源的なものかもしれません。ひとの自由を奪わず、尊厳をまもりながら、戦争をすることはできないからです。

三つ目は、功利的、効率的といった価値観を相対化することです。産業革命からでしょうか、経済的指標や効率といった、非常に狭い基準で価値を判断することが、多くなっているように思います。数値化しにくいものを、単に、価値が見えづらいというだけの理由で「無駄」として切り捨てる。わたしも、その傾向が強くなることがあります。あぶないと感じると、“Against Reductionism”「還元論に注意」と心の中で叫ぶようにしています。全体をとらえた価値観なのか、それともひとつの断面だけを見た評価なのかを問うことです。

四つ目は、自己中心からの解放です。自分がたいせつにしたいことと、他者がたいせつにしたいこと、または生きている世界でたいせつにしようとしていることと矛盾しないだろうか。自分が求めることが、共有可能なのだろうか、整合性があるだろうか、と問うことです。独善的かという問いも似ているでしょうし、その方向に進んでいくことに、持続性があるかと問うことも含みます。

2.3 教育から学修へ

わたしは、大学の教育に40年ほど関わってきましたが、何回か目が開かされる思いをした経験があります。ひとつは、個人として教育に取り組むということから、大学として責任をもつ教育の一部という認識を持ったこと。さらに、質の高い教育を提供しようとしても、それが学生の学修につながらなければいけないという、教育から学びへの視点の転換。そして、多様な学修背景、学修目的、学修環境、さらに様々な障害や困難を抱えた学生の学修を支援すること。そして、教育の特性でもある、結果をすぐに測ることができないものにたいして、どう取り組み、改善していくかということです。今日は、そのお話しはできませんが、自分が様々な考え方にとらわれていることに気づき、解放されるたびに、それまでよいと思っていたことが、まったく不十分であることに気づかされた経験を何度もしました。

¹このような質問自体が「自由さ」がたいせつにされている証拠であり、貴重なことだと思います。

2.4 無知

それは、自分が如何に無知であるかに、気づかされたと表現してもよいと思います。理解が深まると、分からない世界が目の前に広がっていることを発見するという感覚です。私は殆ど知らないのだと、謙虚にさせられる体験だとも言えます。もし、私たちがかなりのことを理解しているのだとすると、新しい視点が開かれて見えてくる世界の殆どは、知っている世界であるはずですが、全く新しい地平を見るのです。

3 信じること

3.1 学ぶことと信じること

「自由に思考すること」は「学ぶこと」とも言い換えることができ、「解放されていく」ことは「造り変えられ・成長すること」とも言うことができます。先ほど、自由に思考し、学んでいくと、自分が無知であることを、知るようになってお話ししました。次に「信じること」について考えたいと思います。わたしは、信じることの背景にも、無知があるように思います。知らない、理解できないけれど、信じる。信仰とは「真理を事実と認識すること」ではなく「達し得たところに従って²、真理だと認識すること」に、自分の人生を委ね、それに忠実に生きること」ではないかと思います。完全に理解したことを信じる必要はないでしょうし、よく分からないことであっても、自分の足をそこに置いて、歩んでいきたいせつさもあるでしょう。また、認識した真理の内容は、変化していくものでもありますし、それが、造り変えられること、成長にもつながるように思います。

2013年のキリスト教週間に、並木浩一先生をお招きして「学ぶことと信じること」という題でお話ししていただきました。そのビデオがICU OpenCourseWare³としてインターネット上で公開されていますから、ご興味のあるかたはご覧下さい。

学ぶこと、信じることについてどのように考えてきたかをお話ししましたが、なにを学び、なにを信じるか、真理の内容と、思考や行動の方向、価値は、どう判断するのでしょうか。

先ほど紹介した世界人権宣言の第一条後半には、次のようにあります。「人間は、理性と良心と

を授けられており、互いに同胞の精神をもって行動しなければならない。(They are endowed with reason and conscience and should act towards one another in a spirit of brotherhood.)」

3.2 ICUにおけるキリスト教 (The Role of ICU in Christianity)

ICUにおけるキリスト教について少しお話ししたいと思います。ICUでは、「キリスト教徒をつくることを目的としていない」「大学から学生への挑戦」であるとして、どのような挑戦なのか大学ホームページに書いてあります。⁴

初代学長⁵湯浅八郎は次のように語っています。

「ICUは決して回心を迫るような狭量な大学ではありません。キリスト教を人生観に掲げ、キリスト教により価値判断を下すという意味において、キリスト教大学なのです。あなた方はキリスト者になるように求められることはありません。けれども、私たちは、あなた方に — あなた方一人一人に — キリスト者としての生き方で挑戦していくつもりです。」

(湯浅八郎『国際基督教大学創立史』341頁⁶⁷)

⁴キリスト教への使命 高等教育の場であるICUは、キリスト教信徒をつくることを目的とはしていません。しかし、学生一人ひとり、学園生活を通じて個々の人生や社会生活の中における神の存在とその力に目を開くよう呼びかけられています。この呼びかけは、学生が自ら真理を求め、それぞれが見出した真理に身を捧げることを願う、大学から学生への挑戦です。

Winning adherents to the Christian faith is not ICU's primary goal. But we encourage our students to open their eyes to the presence and power of God in their lives and in society. Through this environment, students learn that acquiring knowledge is not an end in itself: we believe in the essential unity of knowledge, faith and action. (URL <https://www.icu.ac.jp/en/about/>)

⁵1953-1955年の国際基督教大学要覧には、総長となっている

⁶*The Christian Ideals of ICU*, https://www.icu.ac.jp/about/ICU_ChristianIdeals/ p.57 (E), p.26 (J)

⁷ICU is absolutely not a narrow-gauged, sectarian, proselyting institution... It is a Christian university in the sense that the philosophy of life it upholds is Christian and the value system it stands by is Christian. We do not propose to proselyte. You are not asked to become Christians. But we will dare to challenge you — every one of you — with the Christian way of life. (Hachiro Yuasa, from Charles W. Iglehart, *ICU*:

²ピリビ3章16節 ただ、わたしたちは、達し得たところに従って進むべきである。

³URL <http://ocw.icu.ac.jp/>

私は、25年半前に、他の大学からICUに移って来ました。私の研究分野の公募で、応募資格に「キリスト者」とあるのを見て、ある責任を感じて応募しました。前の大学では、専任教員の中でキリスト者はわたし一人だけで、学生の聖書研究会の顧問などをしていたので、他の適切な方がおられれば、それでよいと正直思っていました。採用となり、出会ったのがこの言葉でした。「私たちは、あなた方に — あなた方一人一人に—キリスト者としての生き方で挑戦していくつもりです。」とある「私たち」の一人となったことを自覚しました。「あなた方一人一人にキリスト者としての生き方で挑戦」する。この言葉を、ICUの一員となった私への招き、挑戦として受け取ったのです。「キリスト者としての生き方」とはどのようなもののでしょうか。

3.3 達し得たところに従って

先ほど、わたしは、信仰とは「達し得たところに従って、真理だと認識することに、自分の人生を委ね、それに忠実に生きること」ではないかと申し上げました。ギリシャ語では、信仰も、信頼も、忠実も同じ言葉です。「真理」ということばを使いましたが、「神様の御心」としても、「もっともたいせつなこと」としても、よいでしょう。それを捕らえてはいないが、求め続け、受け取ったと信じることに忠実に生きることを自分の応答とする。その内容は、年とともに頻繁に変化してきたように思います。それが、「達し得たところに従って」ということばにこめた意味合いです。永田竹司牧師は「見えない希望のもとで」という言葉を使われました。ドイツでナチと戦って最後は処刑されたボンヘッファーは「神の前に、神とともに、神なしに生きる」と表現しました。キリスト者の生き方とは「よく見えない」「神がすぐ答えてくださるわけではない」なかで「達し得たところに従って」謙虚に生きることなのではないのでしょうか。

4 愛すること

4.1 互いに愛し合いなさい

わたしが今、たいせつにしているのは、次の言葉です。

An Adventure in Christian Higher Education in Japan, p.281)

わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える、互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。互に愛し合うならば、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者が認めるであろう。（ヨハネによる福音書 13 章 34 節・35 節）

I give you a new commandment, that you love one another. Just as I have loved you, you also should love one another. By this everyone will know that you are my disciples, if you have love for one another.”

(NRSV, John 13:34, 35)

これは、イエス様が十字架にかかれる直前に、弟子たちと最後の食事をしたときに、語られた言葉で「互いに愛し合いなさい」と教えられています。「互に愛し合うならば、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての者が認めるであろう」と続いています。「イエスの弟子たち」がクリスチャンと呼ばれたことが、使徒行伝（11 章 26 節）にありますから、キリスト者としての生き方の中心に、この言葉があるのではないかと思います。

4.2 新しいいましめ

ここで「新しいいましめ」と「新しい」と、イエス様は言っておられます。なにが新しいのでしょうか。

まず「わたしがあなたがたを愛したように」の部分かなと思います。これは、日本語からもわかるように、過去形で書かれており⁸、イエス様が、十字架に架かる前に言われたことばなので、直接的に、十字架によるあがないの死を通して示された、愛を意味するととるのは、難しいかなと思います。このことばが書かれている、ヨハネによる福音書 13 章は「さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。(Now before the festival of the Passover, Jesus knew that his hour had come to depart from this world and go to the Father. Having loved

⁸実際 Aorist καὶ ὡς ἠγάπησα ὑμᾶς (even as I loved you) で書かれているが、英訳はほとんど、現在完了形をとっている。いずれにしても、これからのことを言っているのではない。

his own who were in the world, he loved them to the end. [NRSV])」(1 節) と始まりますから、それまでもずっと愛しておられ、最後の最後まで愛し抜かれたということでしょう。

この 13 章には、イエス様が、弟子たちの足を洗う記事が書かれているのですが、イエス様を裏切ることになる、イスカリオテのユダも、イエス様が愛し抜かれた、弟子たちの中に含まれています。ヨハネによる福音書にはかなり早い段階から、弟子たちの中に裏切るものがあることを、周囲に告げていたことが書かれています。⁹ イエス様は、弟子たちと会った最初から、ずっと、弟子たちひとり一人を愛され、おそらく苦しまれ、最後の最後まで、弟子たちを愛し抜かれたのでしょう。

他の三つの福音書（共観福音書）には記されていませんが、ヨハネによる福音書には、イエス様がつかまるときに、イエス様が弟子たちを逃がしたことが記録されています¹⁰。そのような様々な場面でのイエス様の愛に思いを巡らせながら、弟子たちは、イエス様は、自分たちへの愛のゆえに、十字架の上で死なれたと理解したのかもしれませんが。

わたしは、もうひとつ「互いに」という部分が「新しい」のではないかと思います。この「互いに」というのは、簡単ではないかもしれませんが、自分の努力で可能なことではないばかりか、おそらく、この「互いに」は、神様とイエス様の交わりのような関係が、想定されていると思われるからです。一方が頑張って愛するのではない。互いに愛し合うというのは、素晴らしいことではないでしょうか。

4.3 Welcome

ヨハネによる福音書には、愛するという動詞が多く使われていますが、そのギリシャ語は、ἀγαπάω (agapao) です。もともとの意味は、歓迎する、Welcome とか、Entertain です。すると、先ほどの聖書の箇所は、「互いに Welcome しあいなさい。わたしがあなたがたを Welcome したように、あなたがたも互いに Welcome しあいなさ

⁹すると、イエスは言われた。「あなたがた十二人は、わたしが選んだのではないか。ところが、その中の一人は悪魔だ。」イスカリオテのシモンの子ユダのことを言われたのである。このユダは、十二人の一人でありながら、イエスを裏切ろうとしていた。(ヨハネによる福音書 6 章 70, 71 節)

¹⁰18:8 すると、イエスは言われた。『わたしである』と言ったのではないか。わたしを捜しているのなら、この人々は去らせなさい。』

い。」となります。おそらく、Welcome したくないひともいるでしょうね。もしかすると、自分のことを Welcome できないときもあるかもしれません。

Welcome することの難しさを思いながら、イエス様に、そして、様々な人々から、Welcome されて生かされていることを受け止め、その応答として、一人一人を Welcome しようとする。互いに Welcome しあうことを願いながら。

5 皆さんと共有したいこと

今日は、卒業・送別礼拝です。私も、3 月いっぱい定年退職ですから、自分を含めて、最後に、皆さんと共有したいことをお話ししようと思います。

5.1 異なる他者を受け入れること

一つ目は、異質な他者を Welcome することです。ICU で学ぶと、様々な国から集まってきている学生と共に学ぶ機会があります。しかし、社会に出て行くと、自分がたいせつだと考える価値観とは、かなり違った価値観を持っている人との出会いがあると思います。もしかするとそのような人達に囲まれることになるかもしれません。是非、Welcome してください。それは、単に、その方々の価値観をそのまま肯定するのではなく「あなたのことを教えてください」として、その人に仕えるところをもって、そのひを通して学ぶことによってです。信頼関係を築き、共に働き、互いに Welcome することにつながるかもしれません。イエス様が愛し抜かれたそのひとから学び、ともに働くことによって、自分を Welcome してくださっている、神様の愛の深さ広さを理解し、たとえ傷ついても造り変えられ、成長できるかもしれません。

5.2 寄付・献金

二つ目は、自らの手の届かないところに心を向ける寄付や献金です。「あなたの宝のある所には、心もあるから (マタイ 6 章 21 節 For where your treasure is, there your heart will be also. [NRSV])」です。給与の、10%、20% 少なくとも、急に生活に困窮することは少ないのではないのでしょうか。最初から、とりわけて、手の届かないところに献げ、神様、または自分以外の人に委ねる。難民支援でも、飢餓対策でも、教育

支援でも、こどもの貧困対策でも、医療支援でも、環境保護でも。お金だけでなく、時間を献げることも素晴らしいことです。自分も見えないところで、たくさん支えられているのですから。自分の目の前にある世界がすべてではないことを意識することができ、自分が行き詰まったときの支えにもなると思います。それも「互いに」ということの実現ではないでしょうか。

5.3 同じ船

三番目は、他者と、同じ船に乗っているという意識をたいせつにすることです。非常に有名なドイツの神学者にカール・バルトという方がいます。ICUの創立時代に大きな貢献をされた、神学者のエミール・ブルンナーとは、神学で論争し合っただけでなく、かなり仲が悪かったようです。そのバルトの晩年の言葉です。

バルト (K. Barth) は、晩年、温和になったと言われたことに触れ「事実私はずっと平和を好むようになり、人は結局その反対者と同じ舟に乗っているのだということをもっと容易に認めるようになり、また時には不当な攻撃を受けても自己防御のために敢えて乗り出そうとせず、他人を攻撃するにもそれほど熱心ではないということもあるようになった。『然り』ということが『否』ということよりも（それもまた重要なことであるにせよ）もっと重要であるように思われてきた。」『バルト自伝』カール・バルト、佐藤敏夫編訳、新教出版社

同じ船に乗っている者として、また、一人一人を Welcome してくださる、神様の恵みに目をむけて生きたいと思います。

5.4 PBP GINFWMY

今日の聖書の箇所は、ピリピ人への手紙の冒頭を選びました。その6節「あなたがたのうちに良いわざを始められたかたが、キリスト・イエスの日までにそれを完成して下さるにちがいないと、確信している。(I am confident of this, that the one who began a good work among you will bring it to completion by the day of Jesus Christ. [NRSV])」と関係した好きな言葉があります。

Please Be Patient. God Is Not Finished With Me Yet.

この頭文字をとって、PBP GINFWMY と書いたバッジも売られています。「忍耐してください。神様のわたしに対する創造の業はまだ完成していませんから。」神様の創造のわざがいまもわたしたち一人一人の内に続いていると信じ、その完成への希望をもって、謙虚に生きていきましょう。

5.5 派遣

礼拝は、カトリックではミサ、派遣という意味です。今日は、魯先生が祝福をしてくださいませ。北中先生は「平和のうちに行きなさい (Go in peace!)」をよく使われます。先日、焼山先生に伺いましたら、他の祈祷文の、いずれにも、派遣の意味が含まれていると言っておられました。つまり、礼拝の最後には、送り出されるのです。「行きなさい」です。ICU では卒業式は、Commencement 「はじまり」と呼んでいますが、礼拝の最後はいつも、始まりです。わたしは、毎週、牧師先生の祝福を聞いて「さあ行くか」という気持ちで一週間を出発することになっています。一週間は、神様の御心を生きることから判断すると、失敗ばかりのこともあります。そして、また、礼拝に戻ってきて、「行きなさい」という声を聞いて、出ていく。わたしたちも、ICU 教会や、他の教会で、派遣のいのりを聞いて、また出ていく。そのような一步一步を通して、少しずつ、神様に造り変えられ、成長させていただきましょう。

祈り

祈ります。

天の父なる神様。どうか、わたしたち、一人一人と共にいて、ともに、あなたの命にあずかる者として、歩ませてください。そして、あなたの御業によって、造り変え、わたしたちが互いに愛し合うことができるように、成長させてください。主イエス・キリストの御名によって祈ります。

アーメン